2022年度　社会連携研究プロジェクト活動報告書

２０２３年　４月　１４日

和光大学地域連携研究センター
　センター長　倉方　雅行　殿

代表者氏名　　加藤　巌

研究プロジェクトの名称【☑2022年度新規プロジェクト　□（　　）年度からの継続プロジェクト】
＊上記にチェックしてください＊

近隣地域の児童向け国際理解教育の実施

研究目的

近隣小中学校の児童らがアジア各国の遊びや踊り、音楽などを体験することで、各国の暮らしをより身近に感じることを目指した。すなわち、児童らに近隣諸国の文化や社会に興味を抱かせ、そこで暮らす人々へも親しみを持たせることを狙った。換言すると、本プロジェクトの目的は、大学の人的資源を用いて近隣地域において草の根の国際理解教育の実践を行うことであった。

プロジェクト所属メンバー　（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）

加藤　巌	教						
松田　朋子	共						

プロジェクトの概要（480字以内）（学内外に向けた分かりやすい表記で記載をお願いします。）

2007年からこれまで、加藤らは近隣の小中学校などで国際理解教育に取り組んできた。和光大学の留学生らと児童が一緒に各国料理を作り試食するなどした。これまでにスリランカ、ネパール、チベット、ベトナム、インドネシア、マレーシア、フィリピン、韓国、中国、モンゴルなどを取り上げた。授業前後には児童の「調べ学習」も行われた。また、事後調査の結果からは、多くの児童が学んだ料理を家庭でもう一度楽しむといったことも分かった。

2020年度以降はコロナ禍の影響で小中学校への訪問が出来なくなった。そこで代替としてこれまでの活動をまとめた小冊子を作成し、配布した。小冊子は好評を得た。また、国際交流の一環としてアジア各国から来日した研究者や大学生らが日本で何を学び得たのかに関する論考をまとめた。これらは、日本地域学会編『地域学研究』第50巻2号と『和光経済』第54巻1号に掲載された。

2022年は対面授業が許可されたので、調理実習を除き、アジアの踊りや音楽を児童向けに紹介することができた。あわせて、和光大生らの異文化体験などをまとめた小冊子も作成できた。

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

2022年10月13日に町田市立金井小学校でインドネシアの文化や社会を紹介する特別授業を実施した。講師は和光大学教授のバンバン・ルディアント先生が務めた。

授業の冒頭でバンバン先生が英語で話し始めると受講している児童の間で緊張が走った。ところが突然、バンバン先生が流暢な日本語に切り替えて話し始めると、今度は児童たちから歓声が漏れ、大いに驚いた様子だった。児童たちにも、目の前にいる人物の外見だけで、その人が何者であるのかを判断してはならないと理解できたようだった。

授業では、インドネシア社会の紹介を聞いた後、児童たちはインドネシア語の簡単な挨拶などを学んだ。そして、児童たちは日本の美しい千代折り紙を使って、インドネシア流（ジャワ島）の紙飛行機を作成した。児童らは大歓声を上げながら、自らで作った紙飛行機を飛ばしていた。授業は笑みの絶えない雰囲気だった。

2022年12月8日と2023年1月12日に和光小学校ではネパールの文化や社会を紹介する特別授業を実施した。講師は和光大学非常勤講師の岡本有子先生（ネパール民族舞踊家）が務めた。

授業では多くの現地写真を見てもらいながらネパールという国について説明した。地理や食べ物、衣服を通じた日本との文化比較を行った。そして、ネパールの子どもたちの遊びの様子や、子どもたちがメインに参加する祭の映像を見てもらった。

様々な楽器の紹介もした。実際に持参した楽器たちに触れてもらってから、用意していたプロの演奏家たちの動画を見てもらった。台所用品として刃を上に向けて食材を上から押して切る「押し切り包丁」も一つ持参して、実際に大根を切って見せたりもした。

また、ネパール先住民のライ族の伝統舞踊のワークショップを行った。踊りに出てくる様々な動物の動きや日常のひと場面の所作を質問しながら教授した。最後はみんなで手を繋いで一つの輪になって踊った。踊りも子ども達の遊びや祭りの動画も盛り上がった。

研究成果の概要（1000字以内・写真が複数ある場合は、600～800字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

上記のように本プロジェクトでは、町田市立金井小学校と和光小学校においてインドネシアとネパールの文化や社会、人々の暮らしを紹介する特別授業を実施することができた。中でも和光小学校では二度にわたり実施することができた。

一方、当初計画していた和光大学の留学生や日本人学生たちが協力して、児童向けにアジア各国の料理を調理実習することは叶わなかった。新型コロナ感染症を防止する観点から、大勢の大学生たちが児童と一緒になって調理実習することは許されなかった次第である。調理実習はこれまで児童に対する教育効果が大きかっただけに残念であった。

そこで代替策として、当該の和光生たちが中心となり、自らの国際交流の経験や児童に伝えたい異文化体験などを冊子にまとめた。完成した冊子は近隣小学校などへ配布する。今回配布する冊子については、今後の近隣小中学校の児童向け国際理解教育に積極的に生かしていきたいと考えている。

なお、共同研究員の松田朋子氏から紹介されたマレーシア人研究者が（和光生向けに）マレーシア社会の特徴や現代的課題を説明する特別講義をオンラインで実施してくれた。同様に松田氏の紹介でイラン人研究者からペルシャの歴史や文化、とくにテキスタイル産業に関する特別講義を受けることができた。これらの特別授業で配布された資料には貴重なものが含まれていた。こうした特別講義を受講した和光大生たちが、今後の児童向けの国際理解教育でその知見を生かしてくれることを期待している。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等） （発行年は厳密に2022年4月～2023年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）
報告書（2021年3月）和光大学国際経済学ゼミナール編「私たちの異文化体験と国際理解教育の実践」 ＊2020年度社会連携研究プロジェクトの成果
研究ノート（2021年7月）「東南アジアの学生は超高齢社会から何を学び、提言したのか」和光大学社会経済研究所『和光経済』第54巻第1号
報告書（2023年3月）和光大学国際経済学ゼミナール編「虹色見聞録」 ＊2022年度学生報告書

【留意点とお願い】

- 報告書は、地域連携研究センターの「報告集」として発行予定です。学内外へ配付・公表し、広報媒体としても使わせていただきます。報告集作成時に、校正をお願いすることになりますが、ご協力お願いします。

- 文言は「である」調で、学外の方にも分かりやすい表現でお願いします。

- 報告書の他、**報告集に掲載可能な写真（複数枚）や図表の提出をお願いします。**
  写真等は、**ワードに張り付けず、別データでご提出お願いします。**
  写真や図表にはキャプションを入れていただくようお願いします。

- 報告書の提出期限：**2023年4月30日（日）**
  提出先：企画室（担当：堀口）　　kikaku@wako.ac.jp